第 23 回生殖バイオロジー東京シンポジウム
シンポジウム：子宮内膜症を考える
大阪,2024.09.08

チョコレート嚢胞と ART

IVF 大阪クリニック
辻勲

子宮内膜症は生殖年齢の女性の 10%、不妊患者の 20～50%に認められる頻度の高い疾患であり、腹腔内癒着、性交痛、骨盤内炎症を引き起こし、不妊症の大きな原因となる。さらに卵巣子宮内膜症性嚢胞(チョコレート嚢胞)は、隣接する卵胞への直接のダメージにより卵巣予備能を低下させ、またチョコレート嚢胞に対する手術もさらに卵巣予備能を低下させる可能性がある。卵巣予備能は妊娠予後に深く関わるため、不妊症の女性において、チョコレート嚢胞が認められる場合にいかに卵巣予備能を温存するかは生殖医療の重要な課題である。
チョコレート嚢胞の存在による卵巣予備能の低下は、チョコレート嚢胞の内容液に含有される活性酸素が周囲の卵巣組織に拡散することによって、卵巣皮質の間質の線維化や微小循環障害を引き起こし卵胞が消失するためと考えられている。したがって、チョコレート嚢胞の内容液をドレナージし子宮内膜症組織を不活化させることが、卵巣予備能を温存するための有効な治療法と考えられる。当院では、チョコレート嚢胞を認める不妊患者に対して、ART 前に嚢胞穿刺吸引術とホルモン療法を併用した治療を行っている。嚢胞穿刺吸引術は経腟超音波ガイド下に実施でき、簡易で侵襲が少なく、卵巣予備能への影響は少ない。しかし、チョコレート嚢胞の再燃・再発が多い。そこで、嚢胞穿刺吸引術を複数回実施し、さらにホルモン療法を併用することでチョコレート嚢胞を制御することができる。その結果、チョコレート嚢胞が著明に縮小することで手術が回避され、さらにチョコレート嚢胞による卵胞への直接のダメージが軽減されることにより ART 成績の向上が期待できる。本講演では、当院で行っている ART 前の嚢胞穿刺吸引術とホルモン療法の併用治療が、ART 成績に与える影響について考察する。